

『ブラザー軒』の詩人

菅原克己の 詩を歌う

かつて仙台にあったレストランをモチーフに描かれた詩『ブラザー軒』は、宮城県亘理町出身の詩人・菅原克己の作品です。この詩に曲をつけて歌ったのがフォークシンガー高田渡でした。高田亡きあと、かつて音楽活動を共にしたミュージシャンの佐久間順平が歌い継ぎ、また菅原のほかの詩にも曲をつけ歌っています。

仙台の街の中で文学と出会う「ライブ文学館」Vol.20では、菅原克己の詩の世界をお届けします。前半で、歌、朗読、音楽で作品世界を堪能していただき、後半では、ミュージシャン、詩人、菅原の作品刊行に携わった編集者に、それぞれの立場から菅原克己の魅力を語っていただきます。

菅原 克己 (すがわら かつみ) 1911-1988

宮城県亘理町出身。詩人。父親の逝去をきっかけに、13歳で上京。豊島師範学校、日本美術学校をそれぞれ退学。16歳の頃、室生犀星『愛の詩集』を読み、影響を受け、その後、自らも詩作を始める。日本共産党機関紙『赤旗』のプリンターや商業図案の仕事に携わりながら詩作を行い、その後、新日本文学会の中心メンバーのひとりとして活動した。1951年、処女詩集『手』を刊行。詩集に『日の底』『陽の扉』『遠くと近くで』『叔父さんの魔法』『定本 菅原克己詩集』『夏の話』『日々の言づけ』『一つの机』小説・エッセイ集『遠い城』エッセイ集『詩の鉛筆手帖——詩の好きな若いひとたちに』没後の2003年に『菅原克己全詩集』(西田書店)が刊行された。

〈 出 演 者 〉



佐久間 順平 (さくま じゅんぺい)

ミュージシャン／歌、ギター、バイオリン

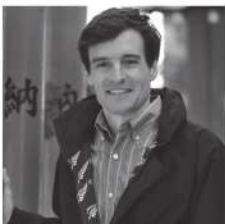
神奈川県逗子市生まれ。作編曲家として、テレビ、ラジオ、映画、CMなどの音楽を制作。ギター、バイオリンなど楽器に堪能なミュージシャンとして、南こうせつ、さとう宗幸、小室等、李政美などのステージ及びスタジオ録音におけるサポート。国内外で数多くの映画賞に輝いた小林政広の作品の多くにおいて、音楽監督を担当。またソロシンガーとして、フォークデュオ「林亭」の一員として演奏活動を行っている。菅原克己をしのぶ「げんげ忌」への出演をきっかけに、菅原の詩を歌ったアルバム「美しい夏」を制作。CDに「最初の花」「あ・り・が・と・う・の・歌」「世界は愛で出来ている」などがある。



榊原 光裕 (さかきばら みつひろ)

ピアニスト／ピアノ

宮城県仙台市生まれ。仙台一高、東北大学工学部、パークリー音楽大学卒業。1996年、宮城県芸術選奨新人賞受賞。作曲家としての作品は、JR仙台駅発車音楽など。1991年スタートの「定禅寺ストリートジャズフェスティバル」などの企画、プロデュース、音楽監督も。1990年から宮城教育大学など各大学にて、またさまざまな講座の講師をつとめている。ピアニストとしてはHappy Tocoでの演奏活動を行うほか、朗読に音楽を添えるステージなども行っている。



アーサー・ビナード (Arthur Binard)

詩人

米国ミシガン州生まれ。コルゲート大学で英米文学を学び、卒業と同時に来日、日本語での詩作を始める。詩人、翻訳家として幅広く活躍。菅原克己の詩の英訳を続けており、菅原をしのぶ「げんげ忌」では、これまでに数回講演を行った。2001年「釣り上げては」で中原中也賞、05年「日本語ぼこりぼこり」で講談社エッセイ賞、18年「ドームがたり」(スズキコージ共著)で日本絵本賞大賞など、数々の賞を受賞。詩集に「ゴミの日」、絵本に「わたしの森に」、エッセイ集に「空からきた魚」など。広島平和賞も受賞。



日高 徳迪 (ひだか のりみち)

茨城県北茨城市生まれ。2022年西田書店代表取締役を退任し、現在同社相談役。「菅原克己詩集一つの机」「遠い城—ある時代と人の思い出のために」(復刻)『菅原克己全詩集』『陽気な引越し—菅原克己のちいさな詩集』の刊行に携わる。



白鳥 英一 (しらとり えいち)

俳優・ナレーター・劇団鳥や主人／朗読

宮城県仙台市生まれ。1989年劇団I.Q.150入団。11年間所属。2011年「鳥屋」(後に「劇団鳥や」)発足。年2回の演劇公演や小学校へのアウトリーチ活動、客演、講師、ナレーター等も。作・演出時は芦口十三(あしのくちじゅうぞう)と名乗る。令和元年度宮城県芸術選奨受賞。



〈公財〉仙台市市民文化事業団 〒981-0902 仙台市青葉区北根2-7-1
お問合せ 仙台文学館 Tel.022-271-3020
Fax.022-271-3044